

COVID-19 時代の読解力

横山千晶

2020年の春、対面での授業が叶わなくなったことで、教育に関わる人々は「教えること」に対する自分の立ち位置をあらためて考えることになった。言葉による情報は対面による交流に限られる中、最も必要であると同時に、その真偽を問いたず間もないままも拡散し、人心を翻弄し続けて今に至る。

この時代に発表者が注目したのは、芸術言語としての言葉である。文学作品は、人類が直面してきた危機的状況を語り手、あるいは登場人物の個人的な経験を通して記録し発信してきた。昔のパンデミック文学が広く読まれた／読まれているのは、今私たちが経験している未曾有の、しかも先が全く見えず自分もいつその犠牲となるのかわからない感染症の脅威を過去の人々がどのように体験し、乗り越えてきたのかという再体験の場を作品が提供してくれるからにほかならない。アルベール・カミュの『ペスト』(1947年)、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの『コレラの時代の愛』(1985年)、スペイン風邪を題材にした菊池寛の「マスク」(1920年)はその一部である。2020年に入って新聞や雑誌、ウェブサイトでもパンデミック文学の特集が組まれた。物語の中に自分を投影し、何らかの回答を得たいという真剣な思いが人々の中で募ったからであろう。

しかし、発表者が学生と共に経験したいと願った読書体験は、感染症がもたらした様々な社会問題、あるいはコロナ禍だからこそ世界中で共有することができた社会問題を他者の目を通して見直すことある。小さな個人がそれぞれこの時代の出来事をどう経験しているのかを言葉を通して体験する、そしてその体験を共感を持って理解する作業こそが、social distancingの時代に必要なのではないか。それは、教員も教えながらリアルタイムで題材に出会っていくというスリリングな教育経験でもある。

そのための題材は、感染症の蔓延と共に購読をオンラインに切り替えた *The New Yorker* 誌や *The New York Times* からピックアップした。*The New York Times Magazine* はパンデミックに際して、2020年3月に *The Decameron Project* を発足させ作家たちに短編の書下ろしを依頼し、7月に発表している。また *The New Yorker* は毎年夏に“Flash Fiction: A Series of Very Short Stories for the Summer”の名のもとにフラッシュ・フィクションをシリーズで出版している。2020年の夏も刺激的な新作がいくつも発表された。同じく題材を求めたのは、毎年10月に出版される *Best British Short Stories* である。もう一つ重要な題材の宝庫は、ポドキャストの *Selected Shorts* である。ニューヨークのシンフォニー・スペースでの朗読会を聴衆の反応もそのまま音声で届けてくれる番組で、長年発表者はこの場で数多くの作品に出会ってきた。この番組から授業の題材とするものが毎年必ずある。すでに読んでいた作品が朗読を通して全く新しい解釈のもとに立ち上がることもあれば、聞いた後で初めてテキストを手に入れて読んだ時に、朗読者の解釈とは異なる読解が自分の中に沸きあがることもある。

限られた紙数の中でストーリーが展開する短編というジャンルは詩の世界に通じる。様々なシンボルやイメージが散文の中に組み込まれ、一つひとつの言葉に意味が凝縮されるからである。

新型コロナウイルスは発表者の作品選択に大きな影響を与えた。というのもパンデミックは作家たちにいくつもの題材を与えたのみならず、作品を通して人々とつながることを強く意識させたからである。それを読み手がどう受け止め、自分の共感の中に落とし込んでいくのか、という過程と考察は、学生がこのパンデミック時代を生き抜き、かつ世界へとつながる重要な手掛かりを与えてくれるはずである。

以上の考察から、2020年以降の授業のための作品選択の基準は、今私たちが生きているこの時代の呈する社会的な状況と課題とした。感染症が広がると同時に2020年4月の段階で社会的弱者の格差問題が大きく取り上げられた。5月25日にはアメリカのミネアポリス州でジョージ・フロイドの警察官の暴行による殺害事件がBLM運動に新たな火を点け、瞬く間に世界へと燃え広がり、6月には奴隷制度、帝国主義、植民地政策の歴史を持つ国や、先住民を抱える各国で抗議運動が起こり現在に至っている。そして2021年8月末日には、9.11のテロから20年を経て、アフガニスタンからアメリカ軍が撤退し、現在タリバン政権の下、同国では様々な問題が引き起こされている。英語を教えるとは、まさに時代の当事者として私たちがそれらの問題をどうとらえ、かかわっていくのかを共に考えていくことである。そのための発信と受信の手段が文学なのだ。

ただし、作品を理解するためには相応の訓練を必要とする。そのプロセスを発表者は、朗読・翻訳・背景の構築・翻案の創作の4つのプロセスを経ることで、学生たちの当事者意識の構築につなげた。

第一歩は音声化である。言葉のリズムが解釈につながることで、日本語よりも豊かなパンクチュエーションが文章の解釈に与える役目に注目するためである。解釈と理解の後にもう一度朗読しなおしてみると、まったく異なる音声化が可能ともなる。そのため発表者は初回の授業では詩を読むことにしている。今回の発表では

E. E. Cummings の [If freckles were lovely] を紹介した。オキシモロンを駆使した2項対立がこの詩のテーマである。そして、「もしもそばかすがかわいいのなら」というごく日常的な話題を題材とした詩が、実は強烈な反戦のメッセージを秘めていることに、学生たちは朗読する中で気づいていくのである。

翻訳を通してレトリックやシンボルの裏にある具体的な背景をつかむことが次の段階である。Joe Meno の短編、“The Boy Who Was a Chirping Oriole” (2008年) は、物語の背景を丁寧に構築していくことで、翻訳のつじつまが合う作品である。語り手は、自分の息子が肌が燐光に光る症状を発症し、徐々に姿が見えなくなり、最後に「囀る高麗鶯だった少年花火」となったと語る。物語は花火の商品カタログのフォーマットを使って花火の紹介とそれぞれの花火にまつわる息子の思い出によって構成されている。紹介される花火はすべて実在のものでありながら、その一つひとつが第2次世界大戦から冷戦に向けて、そして湾岸戦争、イラク戦争へと向かう、今のアフガニスタン侵攻へと連なる戦争で使用された武器の象徴なのである。そして今一つの大切なシンボルは、このタイトルにも隠されている。現在「囀る高麗鶯」であるはずの息子はなぜ、「囀る高麗鶯だった少年」と過去形で書かれているのだろうか。物語の後ろに隠れているのはアメリカの象徴であるハクトウワシである。物語の中には一度も出てこないこの猛禽は大きな影を落としている。おそらく囀る高麗鶯のように優しく愛らしかった息子は今や金切り声を挙げて敵を襲うハクトウワシとなったのだろう。愛国の大義のもとに市民を巻き込んでいく鷹派の政権に対する作者の怒りがメタファーを使ってほとぼしるのだ。

続いて挙げる Larry French の“Mr. Mumsford”は 1984 年に書かれていた物語でありながら、人種差別の複雑さを教えてくれる。南部の学校で用務員を務める黒人男性は胸当て付きのオーバーオールを着ているためにビブス（つまり涎掛け）と呼ばれている。27年間この学校に務め愚鈍な人間と思われていたビブスはある日、だれも自分の本名を知ろうともしないことに腹を立て、校長を殺害しようと思いつく。しかし、彼の本名、「マムスフォード」とは奴隷制度の名残、つまり奴隷所有者の名前なのであり、ビブスの先祖の本名でもないという2重の皮肉を帯びた名前である。そしてマムスフォード自身も白人の校長を妻子のあるキリスト教者であると思いつけているという点から、偏見の複雑さと日常化を読み手に伝えることになる。ペーパーバックにしてほんの2頁足らずの物語の読解と翻訳の作業は、奴隷制度と人種差別という長い歴史の振り返りを必要とする。

4作目の Victor LaValle の“Recognition”(2020年) は上記の The Decameron Project のために書き下ろされた作品の一つで、実際に作者が住んでいるニューヨークのワシントン・ハイツ区の、とあるテナメントを舞台にしている。アメリカで初めて新型コロナウイルスの感染者を出したニューヨークでは2020年に多数の犠牲者を出し、夏には移動モルグのトラックが並んだ。特に移民や貧困層の多く住むワシントン・ハイツ区もそのようなホットスポットだった。その様子をリアルタイムで伝える物語は臨場感に満ちている。住民が一人ひとりと亡くなったり引越したりしていくテナメントに残されているのは黒人の主人公と、ドミニカ共和国からの移民でピアニストだったミルタ、そしてキューバ出身の管理人アンドレイスである。この物語は社会的な弱者とは誰かという課題を考えるきっかけを与えてくれる。カリブ領域からの移民たちはどうして祖国に戻ることができないのか。ドミニカ共和国とキューバの歴史はどのようなものか。今回は物語の背景を構築するのみならず、物語をミルタやアンドレイスの視点から語りなおす翻案を作成することで、作品の切り取られた時間軸をさらに見捨てられた人々の存在を中心に過去へと引き延ばして考えた。

最後に紹介する作品は2020年の8月に *The New Yorker* で発表されたインド系アメリカ人作家、Tania James の“The South Asian Speakers Series Presents the Archeologist and Adventurer Indiana Jones”(2021年) である。この作品は、おなじみ1980年代に大ヒットし、何と近々シリーズの第5弾が公開されるという映画の主人公、考古学者インディアナ・ジョーンズその人がインドに招かれて講演会を行うという疑似講演会をその設定とし、講演後の質疑応答が物語となっている。やり取りの中で明らかにされていくのは、ジョーンズの異文化に対する無知ぶりと、white savior complexや文化財の返還問題、今も残るナチズムなど、現在ニュースとなっている様々な文化衝突の課題である。今回は翻訳と読解の後に、時事ニュースや記事、雑誌論文を学生たちが調査する時間を取り、ジョーンズに対する質問と回答を組み込んだ新たな翻案劇を作成した。

これまでの例で紹介したように、読解の手法は段階を踏んで展開していく。まずは声に出すことが解釈につながっていくとの視点から朗読し、翻訳を通して正しく意味を捉え、登場人物に性格を与え、ついでその物語の歴史的・文化的背景を調査し、さらには最終的に異なる視点から翻案を作り、物語の世界をさらに広げてみるという段階である。単に読んで訳すのみならず、そこから自らの意見を創作という形でスピノフ化してみることで、他者の書いた物語は自分にとっての物語ともなる。

若者たちは生きにくい時代をサバイバルしている。コロナ禍が突きつける今一つの問題は、この未来への不安と孤独感だろう。そんな中で言葉による発信は受け手の共感につながる。今後、英語が読める、ということの先には、創作による発信の可能性、つまり書いて発信できる、という目標を据えても良いのだろう。